

日本からの関心が高まるアジア。学問の領域でも、アジアに関連するさまざまな分野で新しい視点からの研究が進んでいる。京都大学人文科学研究所（京都市左京区吉田）では、最新の情報学を用いて漢文の文献研究を進める一方、中国、台湾、日本で字体が異なる漢字を扱いやすくするシステムを構想している。

京都 時のまなざし

情報化時代の漢字研究

検索画面に「京」と文一スーで、唐代の拓本の字を入力すると、約三十字を検索した。同研究所の「京」の拓本の字が画は、所蔵する一万点の拓面に表示された。「京」本を文字単位に分解しての「口」の部分は、ほとデータ化し、漢字の字形などが「日」の形だった。が歴史的にどう変化して京都大学人文科学研究所きたかを検索できるシステムの安岡孝一助教授が開発した。現在、唐代の拓本約三百点のデ



拓本情報データベースと安岡孝一助教授
(京都大学人文科学研究所)

ータ化を完了。近い将来をそろえる計画だ。同研究所が目指す「東アジア世界の人文情報学」の一環。拓本文字

東アジア共有の知識構築へ

データベースは、ハンケード」として記号化され、中国語でも検索ができる。ところが漢字の場合、国際的に共有できる日本は常用漢字、中国は知識の構築を目指している。簡体字、台湾は繁体字と

る。

異なる字体、字形

「漢字は国によって字体や字形が異なり、コンピュータで扱う場合にさまざまな問題が顕在化してきた」と安岡助教授は話す。拓本文字データベースは、中国の約二千年にわたる漢字の字形を蓄積することで「漢字とは何か」を考える土台づくりを目指す。コンピュータで文字を扱う場合、文字は「コ

して、機械的にコードを振り分ける方式では限界がある」と安岡助教授は言う。部品を組み合わせて字を構成するシステムで、多言語・多文字種を同時に扱う際に優れているとい

形、音、義を基本に

「文字コードという形式は基本的に、表音文字であるアルファベットをもとにした文字観が投影されている」と、守岡知彦同研究所助手も指摘する。守岡助手ら、複数の大学にまたがるグループが進めている「CHIS E(チセ)」プロジェクトでは、漢字の三要素である「形」「音」「義」を基本にすえ、字形を合成させる新しい文字組版システムの研究を進めて

「異体字ひとつひとつを『違う文字』とコンピュータ上で漢字の（文化報道部 岩本敏朗）